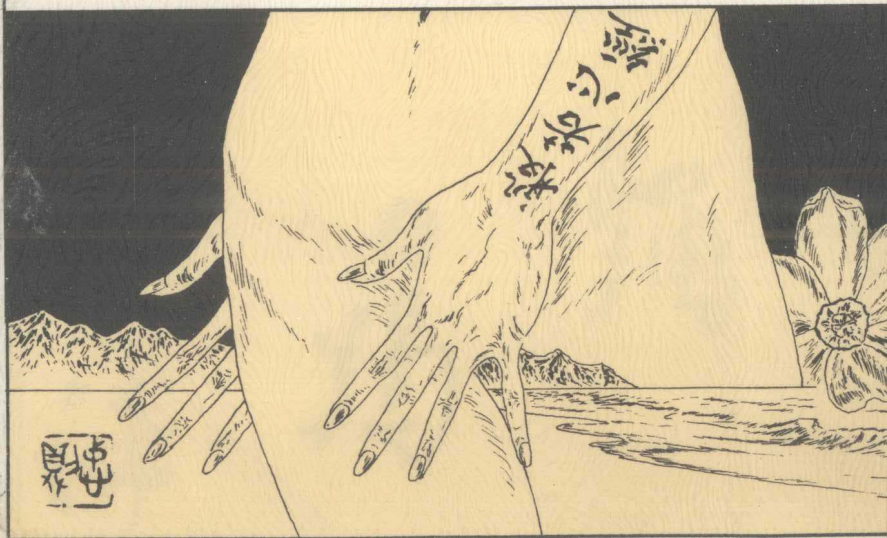


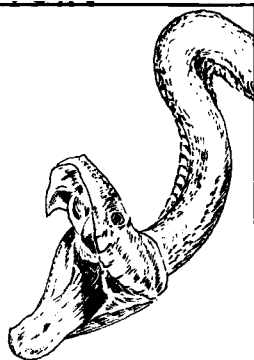


瀬戸内晴美
幻花
(下)

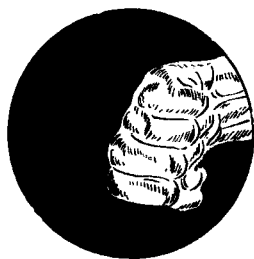




卍



幻花
瀬戸内晴美



幻花（下）

著者——瀬戸内晴美

発行者——佐藤皓三

発行所——昭和51年1月30日初版発行／昭和52年2月28日5版発行
株式会社河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話東京（355）5311（代表） 振替東京0110802

印刷——中央精版印刷株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

定価はカバー・帯にあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

幻
花
①

緋と黒

私にはすでに予知されていたあの怖い、いまわしい不幸の影がお今さまの身の上におおいかぶさっていたのは、それから一年とすぎない時であった。

その事件の起きる三カ月ばかり前、いつものように訪れてきた又四郎が、私を、息が止るかと思うほど愛撫しつくしたあげく、まだ私の胴に巻きつけた腕を離さず、片手で私の乳房を揉みしごきながら、ふっと、熱い息で私の耳に囁いた。

「子供がほしくないか」

私はその言葉の甘美さに、たちまち、全身から桃色の汗があふれたそのような気がした。

「わしと、お前の子供だ。わしとお前の血と肉と骨をわけ持った子供だ」

又四郎は日頃の沈着さに似合わず、床の中ではいつでも少年のように夢見がちなうわごとを口にするのが例だったが、その夜のうわごとめいたつぶやきは、聞き流すことが出来なかった。

「お前は石女ではないだろう。この腰のゆたかさ、お前のほとの中の燃えるような熱さ、わしにしがみつくお前の腕の力、お前が石女でなどあるものか」

うわごとのような口調が尚も続くので私は又四郎のことばをさえぎった。

「誰が私のことを石女といったのです」

「今日、わしが村に入ってきたら、あの四辻の地藏堂の前で畑仕事の休みの茶のみ話をしていた女たちがいた。わしが地藏堂の裏の泉で水をのんでいるのを知らず、女たちがお前とわしの噂をしているのだ」

「何とって」

「なぜ千草さんに子供が産れないのだろう。仲が好すぎるからだとか、いや、夫婦のくせに分れ分れに住んでいるからだとか、それは勝手なことをいいあっていたが、そのうち、もしかしたらお前は石女かもしれない話になった」

私は思わずふきだしてしまった。村の女たちばかりが集ってするお喋りは、男どうしの話より淫らなものが多い。女たちは私たち二人の仲を肴にして、勝手なことを軽口にい散らしていたのだろう。それをまともに受けて、本気に心配する又四郎の他愛なさが私には笑止でならない。日頃は沈着で聡明な男にも似合わないその幼稚さが私にはいとしかった。

「嫉っかんでいるんですよ。本気にすることないわ。赤ん坊は授かりものだもの、いつかきつと産れるわ。たぶん、私たちの赤ん坊は賢いから、今、産れると、私たちに苦労かけると思って、待っているんですよ」

私は又四郎のたくましい首に両腕をまわして囁いた。

「そうか」

又四郎はたしかめるように私の目をのぞきこんでいう。私は又四郎の瞳にむかって、微笑してうなずいた。本当は、一緒に暮せない間には産むまいとして、竜珠に教えられた、薬草をのんでいることはおくびにもださなかった。

「そんなふうに、男って、子供のことだと馬鹿になるのかしら」

私が、からかうようにつぶやいた時、又四郎が照れかくしにあわてていった。

「そりゃ、そうだと。上様だって、その点はわしらと同じだよ。何でも、そのことでこの節御所の中は大変らしい」

「御所の中が……どうして」

私は急に甘やかな気分から覚めて又四郎に訊いかえした。

「御台さまが御懷妊なさったことは知っているか」

「ええ、風の便りに」

「何でも年があけたらまもなくのお産らしい」

「それで」

「ところが、この頃妙な噂が流れはじめている」

はっと、思い当るものがあり、私は息をつめた。

「誰かが、御台さまのおなかの御子を呪っているというのだ」

「そんな馬鹿なこと、でたらめにきまっています」

私のいい方があまり激しかったので、又四郎が愕いて私の顔を見直した。

「人が、呪って、おなかの赤ちゃんをどうこうするなんて、出来ないことなんです」

「しかし、今までだって、あらたかな修験者や、聖は、祈禱で不思議をみせているではないか」

「そんなことありません。相手を眠らせたり、自分の意識のない状態にさせて、うわごとをいわせることは出来るし、物を移動させたり、かくしたりは出来ます。でも、おなかに生れてしまった赤ちゃんを呪いだけで殺すことは出来ません。ただ……」

「ただ、何だ」

「薬を盛って、殺すことは出来るでしょうし、母体を痛めつければ殺せます」

「誰もまだ殺すとはいっていない」

「でも呪っているということは、殺そうとしているということでしょう」

「それはそうだが……しかし千草がそんなに呪いや薬のことにくわしいとは知らなかったな」

「そりゃ……関白様のお邸や、御所で、悦阿弥さんのような人たちの話をよく聞いていますもの」

「悦阿弥か……あいつは魔物だ」

又四郎が、噛んではき捨てるようにいった。

「得体の知れない奴だ。奴は自分で河原者の出だといふらしいが、あんな奴は河原者にはいないのだ」

「え、それはほんとうですか」

「あいつが放下僧でうろつき廻っていた時から、わしらはあいつをうさん臭いといって相手にしなかった」

「悦阿弥さんは放下僧だったのですか」

「そうよ、放下僧の中には偽者も多い」

「何のために偽者の放下僧になるのです」

「密偵よ。今の世の中は、いつ、一揆がおこるかわからないし、いつ、將軍が殺されるかしたものではない。前將軍が赤松に殺されて以来、大きな声ではいえぬが、幕府の威力もがた落ちた。地方の力のある大名たちは、いつでも京に駆けのぼってあわよくば自分ごと、野望をふくらませているわ」

「そのために密偵を傭うんですね」

「それには悦阿弥のような節のない奴が志願する。放下僧は、あのなりで、どこの国へでもぐりこめるから、いい密偵が出来る」

「そうでしたか」

「そいつが、何かの拍手で……たぶん、密偵として手柄をたてたのだろうよ。御所に入りこんでしまった。お今さまのお氣に入りのふりをしているが、大方さまにだまって通じている」

又四郎が平然と怖しいことを口にするので私はあっけにとられてしまった。

「わしら庭者は、御所の中のどんな奥へでも入れば木戸御免だ。わしらが樹の上にいることに気づかず、部屋の中で密談をしていたとしてみる。またわし等は、時には縁の下にもぐりこんで、礎石をいじったりもする。その時、いきなり頭の上から聞いているならぬことが聞えてもくるというものだ。それだけに、御邸の中に入れる庭者は、腕だけでなく人柄が吟味されるのだ。爺のように上様の御信用をいたなければ、なまじつかな御家来よりも上様の御心に近いといえるかも知れない」

それは私にもわかる氣がした。

「わしらはおかげで、御所や高貴な御邸の中でどんな醜いことが行われ、どんな浅ましい陰謀が行われているか大たい知っている。爺はわしが庭者になる心得として、それだけは骨にしみるほど繰りかえして言いかせたものだ。いいか、又、庭者の腕は、わしといっしょに仕事をしていれば自然に会得する。お前はわしの生れかわりのように、天然の庭者の素質を持っているから大丈夫だ。ただ、庭者として生涯を全うするには、仕事先では盲でつんぼになりおおせなければならぬ。口がさけても、そこで見たこと耳にしたことを口外してはならぬ。それが庭者の心得のたった一つのことだ」

祖父がそれをいう口調が私にも聞えるような氣がした。

「石や樹に自分になりきれ。石や樹は口はきかぬ」

又四郎は祖父のことばつきでそうもいった。それから、聞くつもりもなく見るつもりもなく、悦阿弥が、お今さまにも、大方さまにも密偵の役を自ら引き受け両方に信用を得ていることを見届けているというのだった。

「何という怖い人」

「あいつは外道だ。わしらの間では誰もあいつを仲間だとは思っていない」

私ははじめて、又四郎に、悦阿弥の薬がお今さまを弱らせ、小鳥がその薬で死んだことを話した。

「やっぱりそうか。今度の噂の出所も、案外やつが言葉たくみにまきちらしているのかも知れぬ」

「呪いの証拠があがったのですか」

「御台さまの奥庭の白い椿の樹の前に古い祠があるだろう。中の御神体は陽石と陰石だ。侍女たちが、

恋の願かけや、安産の願かけに詣っている」

「ええ、ええ、知っています。夫婦石といっています。丑の刻詣りをすれば、殿御が出来るとか」

「その祠の中に、御台さまの御子を呪う札が入っていたというのだ」

「誰が祠をあけたのです」

「それは知らぬ」

「それだけですか噂は」

「いや、まだあった。大方さまのお局の前に大きな樟があっただろう」

「ええ、樹齢何百年とかいう」

「あの樹の背面に、人形に五寸釘を打ちこんであったのだ」

「それも誰が見つけたのかわからないんですか」

「いや、それは御台さまの乳母が発見したといっている」

「何もかもお今さまをおとしいれるための陰謀です」

私は軀じゅうが恐怖で凍るような気がしてきた。

「でも、それを上様がお信じになどなるわけはないでしょう」

「ところが上様もあんまり同じことを耳にされると、頭からそれを信じないというふうでもなさそう
だ。何でも近頃ではお今さまの許へのお渡りがとだえがちだと聞いている」

又四郎が帰っていつてからも、私は又四郎から聞いたことが気にかかり、不安で胸が騒いでならな
った。

必ず近い将来、お今さまの身の上に、何かまがましい異変がおこるにちがいないのだ。それな
に、私は何ひとつそのことに対して防いであげる手だてもない。せめて、私がお今さまのお傍にいた
ら、少しは、その日の訪れを長びかせることが出来たかもしれない。

それを思うと、私は心がとがめられてならなかった。くれぐれも又四郎にお今さまの身辺を守って
くれるようにと頼んでおいたものの、庭者に出来ることは限度があった。

私はただひたすら、朝夕にお今さまの無事を念じつづけた。

幸い、その年は事もなく暮れた。

暮から正月へかけては、庭者は忙しい時なので、又四郎は訪れがない。

湖は凍りつき、毎日白いものがとばりをひき下すように後から後から降りつづけていた。葦の中の鷺
が寒そうに片脚で立っているのが雪にとじこめられてまるで襖絵のように動かない。

時々、氷を割って魚を釣る漁師の姿が見えるだけだった。

比良の山々も、比叡の山々も、来る日も来る日も、雪に降りこめられていた。陽が照ると山々の雪は
きらきら鏡のように輝くのが目にまぶしい。

風景があまり美しく晴れやかで、その上雪に清められているので目に痛いほどきびしい。そういう風景を眺め暮していると凶変が近づいているとは信じ難くなってくる。

それでもその日は刻々に迫りつつあった。

私には悲しいけれどそのことがわかっていた。

又四郎が、訪れたのは年が改まって七日過ぎてからであった。

雪を払いのけるのもどかしく、又四郎は私の顔を見るなり、私の肩を押えていった。

「千草、驚いてはいけない」

私は又四郎の目を吸いこむように見つめた。もう全身の血が止ったように思った。

「お今さまに何かおこったのですね」

「いや、今日、わしが発つ時はまだ、お今さまは御所にいつものように暮しておいでだった。しかし、昨日の朝御台様に若君がお産れになって……」

「そして若君が……」

「なくなられたのだ」

「……………」

「この世で息をされたのは、半日ばかりだった」

それを聞き終るなり私は又四郎の腕の中に氣を失っていった。

氣がついた時は又四郎の腕に抱きかかえられ、寢床の中にいた。

御台様が産気づかれたのは長禄三年正月八日の朝方からだった。

御産所は細川讃州様の御邸で、細川家へは十日ばかり前からお入りになっていられた。御産所には、大方さまが同行され、朝も夜も、すべてのことを采配していられた。

産所のしつらえもすべて古式にのっとり、産婦はいうまでもなく、産室に出入りの侍女たちも、すべて白衣をまといていた。

祈禱の大僧正が横川から招かれ、産室の近くで夜を徹して護摩を焚きつけ、大法、秘法が祈禱される。七仏薬師、五壇の軍荼梨の御修法、普賢延命、金剛童子、如法愛染王の法などで、護摩の火は炎々と天井を焼きぬかんばかりに燃え上り、祈りつづける僧正の姿が炎に立つ不動明王さながらに見えたとか。

一方、陰陽師は庭に八脚を立て、千度の御祓いをあげている。護摩壇は近い方が御利益がありそうだと大方さまがいわれたので、几帳をへだてただけの近さに組まれていたから、その熱氣と油と、胡麻や芥子の匂いが産室に炎と共に立ちこめて、産婦は息もつまりそうに苦しまれる。

大方さまが、その方がお産が楽なのだといいはれるので、さすがに日頃は勝気な御台さまも虫の息になられ、額からも軀からも脂汗を流しつづけ、夜叉のような形相になって、齒をきりきりと噛み鳴らし、もう死んだ方がよいとまで口ばしられたとか。

鳴弦役の人々が、室に向って、弦を鳴らすのが、竜王の鳴声のように空に響き、おごそかにも、頼もしくも聞えてくる。

侍女たちが、祈禱師がさしたす形代を次々受け取って、足早に産室に出たり入ったりするのがいかにものものしく、御台さまの苦痛をこらえる呻き声がもれてきて、産室に入れない人々は、ただはらはらとそのまわりで氣を揉むばかりだった。

一度、八日の真夜中、産室の中からあわただしい足音がして、侍女たちが色をなし、着物の裾をふみ破りそうに走り出してきた。

いよいよ、御産れかと、待ちあぐねていた人々が駈けよると、侍女は激しく手を振って、

「悦阿弥さん、悦阿弥さん、早く来て下さい」

と、悲鳴に近い声で呼びたてる。

悦阿弥がどこからともなく駆け出してくる手を掴みとるようにして、髪をふり乱した侍女をひきたてて産所へ走りこんでしまった。

もしや、御台様が、難産のあまり、息をひきとられたのではないかという怖れが、人々の胸に等しく湧き上った。

ややたって、また侍女のひとりが走り出てきて、祈禱僧や陰陽師のところへ何事か告げにいき、一段と祈りの声が高まり、護摩木がくべられ、弦が鳴りはためかされてきた。

誰かが、さっき御台さまは苦痛のあまり、ほとんど絶命されていたが、悦阿弥のさしあげた秘薬の効き目で、生きかえられ、また、陣痛に耐えていられるという話を伝えてきた。

又四郎たち庭者も、その夜は一晚中、邸の外庭で焚火をたきつづけ、夜番をつとめていた。

庭者のたまり場に、お産があったと伝わったのは、九日の夜も白々とあけそめた時刻であった。

そこからすぐ又四郎が大方さまの御内命を受け御所へ駆けもどっていった。正式の使者が安産の口上を伝える前に、足の速い庭者が、先に吉報をもたらししておく。又四郎の脚の速さは仲間の間でも格別だった。

上様は又四郎が縁先の庭に平伏するなり、寝所の障子をあけて姿を見せた。すでに外出の支度をしていた。

「男か、女か」

又四郎が頭をあげる前にいわれた。

「若君の御安産でございました」

「若かつ」

又四郎はそんな大きな声を出される上様をこれまで見たことはなかった。

「富子ではかしたぞ」

上様はその場で、牛車の支度を命じられると、大声で侍女たちを呼びたて、御台さまや若様への祝いの品々や、産所の人々への引出物の数々を取り揃えさせられた。

上様の身近によりそい、その支度をするのはお阿茶さまだった。お阿茶さまも上様の御子を早く産んでいたが、姫さまだった。お今さまが遠ざけられてからは、それまで全く忘れられていたような有様だったお阿茶さまが、上様の御傍にいつもかしずくようになっていた。

小肥りで、天平美人のようにふくらしたお阿茶さまは、いつでも、ころころ娘じみた笑い声をあげる素直な人柄で、阿茶子の局とあがめるより阿茶子さまとかお阿茶さまとか呼ばれて親しまれる方がふさわしい感じがする。見捨てられていても恨みがましくなく、また気まぐれな愛のほどこされ方をして、さほど誇りを傷つけられたとも思わず素直に従う人柄は侍女たちの受けもいい。

「産後は油断がなりません。くれぐれも御大切にとお伝え下さい」

車に乗る寸前の上様にお阿茶さまは追いかけるように声をかけた。

途中で、産所から駆けつけてくる使者の馬と逢った。

産所の玄関に駆けこむなり、上様は誰の目も見ず産室の方へ進まれた。

すでに清められた産室には練綾の白衣に着かえた御台さまが横に寝かされた若君の顔をうっとり眺めていた。

「若か、富子出かした」

上様の常になく上ずったお声はお庭さきにいる又四郎の耳にまで伝わった。

護摩壇は改めて御礼の祈禱のための護摩木が焚きつがれていた。

陰陽師の八脚机は早くもとり払われている。

それからは、絹や馬や、太刀などの引出物がつぎつぎ華やかに人々の上にふるまわれ、夜のあけきる頃には、早くも吉報を聞き伝えた大名たちが祝いにはせ集ってきた。

いく人子供が産れても、若君に恵まれなかった上様の手放しの喜ばれ様は、日頃の物静かで感情を面にあらわさない上様を見なれている者の目には、何か異様に映ってきた。

異様さは凶兆につながっていたとは、まだその日の正午には誰ひとり気づいたものはいなかった。

その日の午すぎ、御台さまのはりさけそうにみなぎりきった乳房にしがみつかれたまま、若君は、突然、黒血のようなものを口から吹き、激しいけいれんにひきつったまま、一瞬の間に息をひきとってしまわれたのであった。

すでに始まっていた祝宴の席に悲報がもたらされた。上様は若君への進物の太刀を飾った床の間を背にして盃になみなみと祝い酒を受けていられたが、小声で侍女が伝えたその悲報を聞くなり、はたと盃を落され、棒立となられたという。

それからの騒ぎは語り伝えるのも浅間しいと、又四郎が私に話した。

「それだけならいいのだが、もうその夜のうちに怖い噂が人の口から口へと伝わっていったのだ」

「お今さまが、呪い殺したというのですか」

「そうだ。御存じないのは、御所の内ではお今さまの局だけかもしれぬ。上様は冷くなられた若様を抱きしめられ、あたりはばかり泣きくどかれていた。こんなに早く死ぬ命なら、なぜ生れて来て、この悲しみを自分に与えてくれたのかと。それから、もう自分は仏も神も信じる気にはならないともわめかれた」